

京都大学宇治構内の鳥類相

二村 一男

はじめに

京都大学宇治地区は昭和25年に京都大学に移管された旧陸軍用地に現在のような木質科学研究所をはじめ5部門の大学附置研究所がある。京都市街地にある吉田地区に比べると面積の割に建物が少なくゆとりのある環境である。

著者^{1), 2)}はこれまで吉田地区の北部構内にある演習林本部試験地の鳥類相を調べてきた。宇治地区についても、構内に潤いを与えている緑地の役割を果たしている樹木の成長に伴う鳥類相の変化を把握するために現時点での状況を明らかにすることは意義あることと思われたので報告する。

調査地及び調査方法

宇治地区は宇治市の北東部に位置し、面積は21.69ヘクタール、敷地の東西は防衛庁陸上自衛隊と宇治市立東宇治中学校が隣接し、近くを宇治川が流れ、一部は民家、水田、桑畑が隣接している。樹木の種構成は大径木ではクロマツ、アイグロマツが多く、一部外国産マツのテーダマツの小林分もある。広葉樹はエノキ、ニレ、ムクノキ、クスノキ、センダン、ハコヤナギ、ユリノキなどで中径木はサクラ、シイ、カエデ、アラカシ、トウネズミモチ、サンゴジュなどで、低木はグリーンベルトとしてヒラドツツジ、ユキヤナギ、ピラカンサなどが植えられている。これらのうちエノキ、ムクノキ、ニレ、クスノキ、センダン、トウネズミモチなどの実は鳥類が好む餌となっている。

調査方法は、鳥類の確認、生態観察には四季を通じ9倍の双眼鏡を使用した。調査時刻は早朝に行い夏季には夜間も行った。調査期間は1996年4月から1997年1月に集中して実施したがそれ以前の記録も含めた。鳥類目録の配列順序は、日本鳥類目録改訂第5版(日本鳥類学会1974)、和名、学名は、小林³⁾によった。観察例の少ないものは、観察年月日を記録し、観察記事をできるだけつけ加えた。

調査結果及び考察

宇治構内の鳥類目録

ウ科

Phalacrocorax carbo hanedae Kuroda カワウ

‘96.5.18. 1羽が通過。宇治川に周年生息する。

サギ科

Nycticorax nycticorax nycticorax (Linnaeus) ゴイサギ

‘96.6.2池に1羽。時々夜間に鳴きながら通過する。

Bubulcus ibis coromandus (Boddaert) アマサギ

‘96.6.2. 4羽が通過

Ardea cinerea jouyi Clark アオサギ

‘96.5.3, ~6.15に2~5羽程度が池に飛来する。また、通過個体を観察することもある。

Egretta garzetta garzetta (Linnaeus) コサギ

ほぼ周年1~3羽程度が池や排水路に飛来する。

ガンカモ科

Anas poecilorhyncha zonorhyncha Swinhoe カルガモ

‘90.10.12, 1羽, ‘96.5.26~11.3に1~4羽が池に飛来する。

Anas crecca crecca Linnaeus コガモ

秋から冬期に時々池に飛来する。‘96.10.12, 3羽, ‘96.10.20, 2羽,

ワシタカ科

Milvus migrans lineatus (Gray) トビ

周年生息するが構内の上空周辺を1~2羽が飛翔または通過する。

キジ科

Phasianus colchicus tohkaidi Momiyama キジ

ほぼ同一場所で雄1羽を観察する。‘96.4.28に鳴き声, ‘96.5.5, 雄1羽, ‘96.5.18, 雄1羽, ‘96.12.29, 雄1羽

チドリ科

Microsarcops cineris (Blyth) ケリ

‘92.2.22, 隣接地の水田で1羽。‘96.4.20, 1羽が通過。隣接の宇治川及び近くの巨椋干拓地では周年生息し, 繁殖している。

シギ科

Tringa incana brevipes (Vieillot) キアシシギ

‘96.5.12, 4羽が池に飛来, ‘96.5.18, 4羽が通過する。

Tringa hypoleucos Linnaeus イソシギ

‘96.10.7, 1羽が池に飛来する。

ハト科

Streptopelia orientalis orientalis (Latham) キジバト

1~4羽程度が周年生息する。

Sphenurus sieboldii sieboldii (Temminck) アオバト

‘96.4.28, 4羽, ‘96.5.12, アラカシの樹冠で4羽が休息していた。警戒心が強くすぐに飛び立つ。

ホトトギス科

Cuculus canorus telephonns Heine カッコウ

‘96.5.3, 渡り途中の個体を1羽観察。

カワセミ科

Alcedo atthis bengalensis Gmelin カワセミ

時々池や排水路に1羽が採餌にやってくる。隣接の宇治川には周年生息する。

キツキ科

Dendrocopos kizuki nippon (Kuroda) コゲラ

1~2羽程度が周年生息している。

ヒバリ科

Alauda arvensis japonica Temminck & Schlegel ヒバリ

春季に周辺から時々さえずりを聞く。

ツバメ科

Hirundo rustica gutturalis Scopoli ツバメ

3月20日頃渡来し5月中旬から6月中旬にかけて5~15羽程度が構内の上空を飛翔する。空き地の水たまりで巣材の泥を運んでいる個体を観察することもある。周辺の民家で繁殖している。

セキレイ科

Motacilla cinerea caspica (S.G.Gmelin) キセキレイ

秋から冬にかけて1~2羽程度観察できる。

Motacilla alba lugens Gloger ハクセキレイ

冬鳥として渡来するが少ない。'91.2.11, '92.2.23, '96.11.10, に1~2羽観察する。

Motacilla grandis Sharpe セグロセキレイ

1~4羽程度が周年生息する。

Anthus hodgsoni hodgsoni Richmond ビンズイ

12月から3月にかけて3~8羽程度が冬鳥として渡来するが少ない。地上で採餌することが多い。

ヒヨドリ科

Hypsipetes amaurotis amaurotis (Temminck) ヒヨドリ

周年生息し、個体数は一番多い。特に10月下旬から11月上旬にかけて50~70羽程度の群れになることがある。トウネズミモチ、センダン、コノデカシワの実を好んで採餌する。

モズ科

Lanius bucephalus bucephalus Temminck & Schlegel モズ

隣接する水田や構内のやや開けた場所に1~5羽程度が周年生息し、雄が多く秋の高鳴きは9月中旬から10月はじめである。

ツグミ亜科

Phoenicurus auroreus auroreus (pallas) ジョウビタキ

'96.11.10, 1羽, 民家付近では比較的よく観察できる。

Turdus dsuma toratugmi Momiyama トラツグミ

'84.4.1, に鳴き声を聞く。'92.2.16, マツ林で1羽観察する。

Turdus chrysolaus chrysolaus Temminck アカハラ

'96.4.27~28に渡り途中の1羽を観察。

Turdus pallidus Gmelin シロハラ

冬鳥として1~2羽程度が渡来するが林床に単独でいることが多いので直接観察することは少ない。

Turdus naumanni eunomus Temminck ツグミ

冬鳥の代表として親しまれている。3~4羽程度を観察でき、池で数羽が水を飲んでいて。終認は5月4日の5羽であった。

ウグイス亜科

Cisticola iuncidis bruniceps (Temminck & Schlegel) セッカ

'96.5.12, 宇治川から漂行したと思われる1羽の鳴き声を聞く。

Cettia diphone cantans (Temminck & Schlegel) ウグイス

初鳴きは3月中旬頃である。11月はじめから3~5羽程度が越冬する。

Phylloscopus occipitalis coronatus (Temminck & Schlegel) センダイムシクイ

‘96. 5. 18, 1羽がさえずっていた。‘96. 11. 3, 渡りの途中と思われる1羽を観察。

ヒタキ亜科

Miscicapa griseisticta (Swinhou) エゾヒタキ

‘96. 10. 7, 1マツ林で渡りの途中と思われる1羽を観察。

エナガ科

Aegithalos caudatus trivirgatus (Temminck & Schlegel) エナガ

周年生息するが個体数は少ない。‘96. 5. 26, に若鳥3羽を観察した。秋から冬にはシジュウカラと混群になることもある。

シジュウカラ科

Parus varius varius Temminck & Schlegel ヤマガラ

周年生息するが数は少ない。‘96. 9. 1, 1羽, ‘96. 11. 16, 1羽。

Parus major minor Temminck & Schlegel シジュウカラ

周年生息し, 冬期には5~10羽程度の群れを観察することがある。‘96. 5. 26, に3羽の若鳥を観察したので繁殖していると思われる。

メジロ科

Zosterops palpebrosa japonica Temminck & Schlegel メジロ

周年生息し, 個体数も多い。秋から冬に10羽程度の群れで行動し, 時々50羽程度の群れを観察することもある。

ホオジロ科

Emberiza cioides ciopsis Bonnaparte ホオジロ

周年生息するが数は少ない。‘89. 2. 26, 1羽。

Emberiza rustica latifascia Portenko カシラダカ

‘89. 2. 26, 1羽, ‘90. 3. 18, 1羽, ‘96. 12. 15, 3羽, 宇治川周辺から漂行した個体と思われる。

アトリ科

Chloris sinica minor (Temminck & Schlegel) カワラヒワ

周年生息するが数は少ない。通常3~10羽程度で構内を通過するのを観察する。秋に10~50羽程度の群れのこともある。‘96. 11. 3, 4羽がユリノキの実を食べていた。

Carduelis spinus (Linnaeus) マヒワ

冬鳥として渡来。‘96. 11. 10, に100羽程度の通過群を観察した。

Eophona personata personata (Temminck & Schlegel) イカル

時々5~30羽程度の通過群を観察することがある。20羽程度の群れで地上で採餌することもある。‘96. 10. 12に20羽がニレの実を食べていた。

Coccothraustes Coccothraustes Japonicus Temminck & Schlegel シメ

冬鳥として渡来するが数は少ない。‘91. 2. 17. 1羽, ‘96. 12. 14. 3羽

ハタオリドリ科

Passer montanus saturatus Stejneger スズメ

30~50羽程度が周年生息し, 冬期には100羽程度の群れで越冬する。研究所の4階付近のベランダに造巢されたコシアカツバメの古巢で営巣していると思われる。冬期でもよく出入りしているので罅に利用していると思われる。

ムクドリ科

Sturnus cineraceus Temminck ムクドリ

3～5羽程度が周辺部から漂行する。時々50羽程度の群れが地上で採餌することもある。

カラス科

Covus corone orientalis Eversmann ハシボソガラス

3～6羽程度が周年生息する。'96.5.3, 研究所付近で繁殖したと思われる若鳥1羽に給餌していた。

Corvus leuillanti japonensis Bonaparte ハシブトガラス

ハシボソガラスより少ないが周年生息する。

宇治構内で四季を通じて26科48種の鳥類が記録された。鳥類を渡りの型に分けると、夏鳥は繁殖のために南方から渡来するもの、冬鳥は、越冬のために北方から渡来するもの、留鳥は、周年生息するもの、旅鳥は、春と秋の渡り時期に一時的に滞在するものであるが、一時的に周辺部から漂行したものも旅鳥とした。これらの割合は夏鳥が5%, 冬鳥が20%, 留鳥が55%, 旅鳥が20%である。このように宇治構内は、留鳥が主体であるが冬鳥や旅鳥にとっても絶好の越冬、休息地として重要な環境といえる。とくに近年市街地や公園などの緑地に生息分布を広げるヒヨドリ⁴⁾の個体数が多く晩秋から初冬にかけて一時的に個体数の増加がみられ、センダン、トウネズミモチの実を好んで採餌にやってくる。そのほかメジロ、スズメの個体数も多くスズメは50～100羽程度が周年にわたって生息している。研究棟の東側に面した4～5階付近のベランダでは、コシアカツバメの古巣に数羽が入り出しているので埒や営巣に利用していると思われる。ちなみに著者⁴⁾は、山村地域(美山町)のスズメの調査をした時にもコシアカツバメの巣で営巣しているスズメを観察したことがある。

構内の西部端に化学研究所の雨水槽(池)(巾30m×長50m×水深3m)がある。施設掛によると当初実験排水処理用として設けられたが1981年頃からは雨水処理施設の池として活用されている。この池にはカワセミをはじめカルガモ、コガモ、アオサギ、コサギ、ゴイサギ、イソシギ、キアシシギ、セキレイ類が飛来する。おそらく隣接する宇治川付近から一時的に飛来したのと思われるが、この場所は害敵が襲うことがないことからこれらの鳥類にとって水飲み、採餌、休息地に適した場所であろう。

真鍋ら⁵⁾の宇治構内の植生調査によると樹齢の若い樹木も多く整枝剪定された樹木の割合は低く、その空間的な広がりを含めて樹木も最も自然状態で生育していると述べている。このことが鳥類にとって繁殖、休息、埒などに利用されている。今後は、宇治川の増水等で雨水槽に一時的に避難する水鳥の飛来状況を記録して水辺に生息する水鳥の後背地としての関係を調べることも意義のあることであろう。

引用文献

- 1) 二村一男(1993)本部試験地の鳥類相。京大演集報。25.1-10
- 2) ———(1994)本部試験地の鳥類相の季節変化。京大演集報。26.1-8
- 3) 小林桂助(1956)原色日本鳥類図鑑。保育社。大阪。pp284
- 4) 二村一男(1996)山村地域におけるスズメの生息分布—美山町の事例—。京大演集報。29.7-13
- 5) 真鍋逸平・安藤信・川那辺三郎(1991)京都大学構内植生調査I—大径木の樹種構成と管理状況の構内ブロック間の比較—。京大演集報。21.65-77